
ハロー、眠り姫

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロー、眠り姫

【Nコード】

N3208I

【作者名】

久芳

【あらすじ】

とある一国の王女・アンジェは、ある日突然自分以外の国の人々が眠りに落ちてしまった。それから一年、静まり返った国に、ロイという魔術師がやってくる。彼は国中を眠らせる奇病の原因をつきとめ、アンジェとともに解決へと導こうとする……。

ハロー、ハロー。

わたしの声が聞こえますか？

今日も良いお天気ですね。

こちらは何事も変わりありません。

お城のみんなも元気です。

城下町も平和な日々が続いています。

みんなみんな、眠っています。

国は今日も静かです。

ハロー、ハロー。

わたしの声が聞こえますか？

空の彼方に呼びかけるのをやめて、アンジエはそっと、ため息をついた。

城下町から国境の果てまでを見渡せる城の塔は、のぼるといつも風に髪をさらわれてしまう。豊かにうねる黒髪を耳にかけながら、アンジエはぼんやりと、静まりかえった国を見下ろしていた。

この国に眠り病が広がって、一年がたとうとしていた。

アンジエが十七になる誕生日の朝。目を覚ますと、自分以外の人たちがすべて、深い眠りに落ちてしまっていた。

両親である国王も王妃も、寝室で仲睦まじく寄り添いながら静か

な寝息をたてていた。朝早く仕事をする厨房の人たちは、それぞれ手に包丁や野菜を握ったまま床に眠り落ちていた。夜通し城を見張る衛兵たちは、立ったまま頭を垂れて眠っていた。

城の中をくまなく探しても、起きている者はアンジェ以外にいなかった。そしてそれは城だけのことではなく、この国の人々までもが、同じように深い深い眠りの底に落ちてしまっていた。

どんなに声をかけても、大きな音を鳴らしても、身体を揺らしても水をかけても、一度眠ってしまった者は決して起きることがなかった。命が尽きたわけではなく、ただ静かな寝息をたてるだけ。飲まず食わずで昏々と眠り続けているというのに、不思議と命を落とす者は誰一人としていなかった。

眠り病の噂を聞きつけた近隣の国の医師たちがかけつけても、みな原因を説明する以前に、国に足を踏み入れるなりころんと眠ってしまうのだった。そしてそのまま目覚めることなく、今もこの国のどこかで、規則正しい寝息をたてているに違いない。

手薄になった国を狙う賊が入ってきたとしても、それもまた医師たちと同じように、睡魔に襲われて眠ってしまう。アンジェのいる城にまでたどり着ける者は、誰もいなかった。

かろうじて眠りから逃れて国を出た人々の口から、この国の話はすぐに広がった。だからはじめの三月ほどは、国を心配してひっきりなしに人が訪れていたけれど、今となっては病がうつると近寄る者もない。小さな国々が集まる中で、ただ一国だけ陸の孤島になっ

てしまっていた。アンジェはひとり、城に残され、再びこの国が目覚めるのを待ち続けていた。

毎朝の日課は、城の塔にのぼり、目を凝らして城下を誰か歩いていないか探すこと。そして、誰かの耳に届くようにと、塔の上から呼びかけること。

みんな、そろそろ起きませんか？

そう呼びかけ続けるうちに、すぎた日々は気が遠くなるほどに長

かった。

「　こんにちは、アンジェ姫」

そんなアンジェのもとに、病を治せるという魔術師が現れたのは、つい最近のことだった。

ロイ、と名乗った魔術師は、アンジェとさほど年の変わらない、精悍な顔つきをした二十歳前後の青年だった。

「あいかわらず今日も、この国は静かだね」

「起きてるのは、わたしとロイだけよ」

普段は吟遊詩人として諸国を漫遊している彼は、風の噂にこの国を知り、好奇心で立ち寄ってみることにしたらしい。自分は眠り病にかからないことに気づき、国の中を散策しているうちに、かすかに聞こえてくるアンジェの声に呼ばれて出会ったのだった。

「ざつと歩いてみたけど、やっぱりみんな、すやすや寝てたわ。よくもまあ、飲まず食わずで一年も眠れるもんだよな」

砂漠の砂のような黄土色のローブに身を包み、背中に古びたギターをかけた姿で、『この国を助けにきた』と言われても、アンジェははじめ、素直に信じる事ができなかった。

今まで手の施しようのなかった奇病を、こんな若い魔術師に治せるわけがない。いずれ彼も眠ってしまい、城に来なくなるだろうと思っていたのに。ロイは隣国に滞在を決め、毎日アンジェのもとを訪れてくれるようになった。

一年ぶりにできた話し相手に、アンジエはすぐに心を開いた。この国では珍しい赤毛と、すこし切れ上がったまなじりが鋭い印象を与えるけれど、アンジエと同じ瑠璃色の瞳は深い優しさをひめていた。

「やっぱりこの眠り病は、伝染病じゃなくて、誰かがかけた魔法なんだ」

それが、彼が国を調べた見解だった。

「伝染病だったらもうとくに隣国にも広がってるはずだし、一年も寝てたら普通、みんな死んでしまはずだ。一人だけ起きてるアンジエのことといい、これは魔術が強く関係してるんだと思う」

ロイとはいつも、アンジエの部屋で話をした。彼は部屋のバルコニーから国を眺めるのが好きで、アンジエは自分のベッドに腰掛けてその背中を見ていた。紅茶もケーキも必要なく、誰かと一緒にいるという時間がとても貴重だった。

アンジエはロイに、すべてを話した。病が広がり国中が眠ってしまったことから、ひとり取り残されたアンジエが毎日どんなことをしていたかもすべて話した。みんなが眠っているのをいいことに、高価なドレスを着て遊んだことも、毎日好きなお菓子ばかり食べていたことも、うっかり国宝の壺を割ってしまったことも、全部ぜんぶ話した。話し相手がいない間にたまっていた言葉を、ロイにすべてぶつけているようなものだった。

彼はそれに嫌そうなそぶりを見せることもなく、アンジエの声を無視することもなく、いつも耳を傾けてくれていた。そして城に閉じこもっているアンジエに、自分が今まで旅して歩いた諸国のことを面白おかしく語ってくれたりもした。

「アンジエは、あいかわらず変わりなく？」

「ええ、まったく変わらないわ」

「なんか、顔色がまた悪くなったもんな」

あの誕生日以降、国の時の流れは止まってしまったようだった。手入れをする者がいなくても城は荒れることがなく、厨房の食材が腐敗することもなかった。アンジエもさほど空腹を感じることがなく、髪や爪が伸びることもない。自分の中を流れる時までが、とまってしまっているようだった。

そしてなにより、アンジエは眠ることができなくなってしまった。日が沈んで夜空に星が出ようとも、どんなにベッドの中でうずくまろうとも、睡魔が襲ってくることはまったくなく。何日も悶々と夜を過ごし、一月たったところであきらめた。布団の中にはもう長いこと入っていない。

「童話の眠り姫なら、わたしもみんなと一緒に眠れるはずなのにね。そして王子様がキスをして起こしてくれるのに、肝心の姫様がこれじゃあ魔法なんて解けないわ」

足をばたつかせながら唇をとがらせるアンジエに、ロイは肩をすくめる。バルコニーから部屋に戻ってきたかと思うと、おもむろにローブの中からクッキーを取り出して、アンジエの口に無理やりねじこんだ。

「俺もまあ、眠り病の国っていうから、てっきり眠り姫を想像して来たんだけどな」

粉砂糖をふりかけたクッキーは口の中でほろほろと崩れて、甘さに自然とアンジエの目もとがやわらかくなる。その表情を見て安堵したようで、ロイはアンジエの隣に腰掛けた。

「眠れなくて、辛いのか？」

「……身体は平気なんだけど、ね」

眠れずに夜を迎えると、えんえんと同じことばかりを考えて過ぎてしまう。流れ星を数えて過ごした夜もあれば、両親の寝室に行つて、その穏やかな寝顔を見ながら涙したことが何度もあった。

眠れなくて一番辛いのは、身体ではなく、心だった。

「俺が来るまでの間、なにしてたんだ？」

「はじめは、城や国の中を歩いて回ったけど……誰も起きてないって気づいてからは、ずっと城の中にいるわ」

一日中ぼーっと空を眺めているときもあれば、衝動的に城を磨きあげたこともあった。書庫の本を読みふけて時間をつぶし、それに飽きたら城で眠る人たちの寝顔をひとりひとり見てまわったりもした。

姫らしくしなさいとうるさい侍女たちも眠りこけてしまっているので、ロイが来るようになるまでは自分の身なりですらどうでもよくなっていた。こうして彼と会うようになって、久しぶりにドレスに袖を通したのだ。

「はやく魔法をとかないと、アンジェの身体がもたないな……」

しみじみといった様子で呟いたロイに、アンジェはベッドの上で膝を抱えた。

「……でも、わたしね。この病が広がってすこしほつとしてるの」

自分を救おうとしてくれている人の前で、何を言うつもりなのかわかってはいるけれど、一度口が開くと言葉がとめどなくあふれてくる。ロイはすべてを話してしまいたくなるような、不思議な空気を身にまとっていた。

「この国が眠っている間は、他の国の人たちが来ることもないでしょう？ 賊が入ってきててもみんな一緒に眠っちゃうし、お父様を殺して国を奪おうって思ってる人も、やっぱり国に入るとはたつと寝ちゃうのよ。このままみんな眠り続けていれば、この国は安全なんだろうなって、たまに思ったりするの」

「アンジェ……」

「わたしにね、縁談の話があつたの」

初耳だったようで、ロイは片眉をあげた。

「この国は、とても小さいでしょ？ だから、領土を広げようとする周りの国に狙われてたの。それで、隣の国の王様が、自分の息子とわたしが結婚して、同盟を組みませんか？ 声をかけてきたのよ」

それは事実上、国を吸収しようとする動きだった。もちろんそんなことをしたくないと思うのが城の中の考えだけど、城下の民は大人数しく隣国と手を組んだほうが安全だと思っていた。アンジェの他に跡継ぎもいない王族の血は簡単に途絶えてしまう危険があり、そしてなにより、もちろんもあつたからだ。

縁談を断れば、隣の国は力づくで国を奪おうとしてくるに違いない。アンジェの動きで、この小さな国のすべての人たちの生活が変わってくる。それを思うとうかつに口を開くこともできなかった。

「だから、眠り病で国が混乱したとき、ちょっとほつとしたの。ああ、自分は結婚しないでもいいんだって、嬉しかったのよね」

眠る民の心配よりも、自分のことを考えてしまった一国のお姫様。軽蔑されただろうかとおずおずと視線をやると、ロイは怒りもあきれもせず、ただだまってアンジェの話に耳を傾けてくれていた。

「……でも、アンジェは、ひとりだとさびしいんだろ？」

それにアンジェは、こくりとうなずいた。

「さびしいわ。でも、国が元に戻るのはやっぱりこわいの」

国中にかけられた魔術が解けたとき。眠りに落ちている人々が目覚めたとき。止まっていた国の時間は再び動き出して、領土を狙われる問題がまた浮上して、民のために手を尽くさなければならぬあの日々が戻ってくる。

「そっかぁ……」

抱えた膝に額をうずめるアンジェの肩を、ロイがそっと包み込んだ。

「だからアンジェは、この国に魔法をかけてしまったんだな」

「わたし、魔術なんて使えないわ」

思いもよらないロイの言葉に、アンジェはすぐさま否定した。

「使えないわ。わたしに、魔力なんてないもの！」

「……人は、さ。みんな生まれながらに魔力をもっているもんだよ。たいていの人はそれに気づかず一生を終えてしまうけど、なにかの拍子に魔力が目覚める人はけっこう多いんだ」

ベッドに両手をうずめて、ロイは仰ぐように身体をそらした。

彼は生まれながらに、魔力が開花していた子供だったらしい。だから魔術を使うことに何の苦も感じることなく今までやってきた。けれど一方では、どんなに修行に励み魔力を望んでも、結局死ぬまで開花しなかった人が大勢いるとも教えてくれた。

「なにか強烈なきっかけみたいなものがあるとき、人間は本能的に自分を守ろうとして魔力が目覚めるんだよ。アンジェもきっと、なにか理由があつて国に魔法をかけてしまったんだろうけど……そのかけかたがまずい」

「まずい？」

にわかには信じられないことを言って、ロイはさらに追い討ちをかけてくる。身構えるアンジエに手を伸ばし、彼はそっと、アンジエの目元に触れた。

「このままだとアンジエは、眠れないまま身体が衰弱していつて、いずれ死んでしまうと思う」

落ち窪んだ眼窩をいたわるように、ロイは目のふちを指で撫でる。
「大きな魔法を使うと、それ相応の反動がかえってくるんだ。干ばつを嘆いて雨乞いをする、そのまわりの土地で雨が降らなくなってしまうみたいにさ。アンジエは国中を眠らせる魔法の反動で、自分の睡眠を抑えてしまったんだよ」

「でも、別にわたし、眠れなくても大丈夫よ？ お腹だつてすかないし、身体だつて別にそんな……」

「アンジエがそう思ってるだけで、身体は確実に衰弱してるんだ」
ふいに、ロイのまなざしが鋭くなった。

「いいか、アンジエ。国にかけられた魔法を解くことは俺にもできるけど、かけた本人が解くのが一番安全なんだ。だからこの国の魔法を解くのは、アンジエ自身なんだよ。わかるだろ？」

「でも……」

アンジエがかけたんだと言われても、本人にまったく自覚がないんだから解き方もわからない。解くことができると自分で言ってるんだから、ロイが解いてくれればいいものを。

「俺が魔法を解いても、国中のみんなが助かるかはわからないんだ」
すべての民が助かるとはかぎらない。魔法が解けないままの人もいれば、命を落としてしまう人だってでてしまうかもしれない。

自分がかけてしまった魔法のせいで、民にたくさん死者が出てしまったら。今までアンジエたちに豊かな生活を与えてくれたのは、他でもない国民のおかげだった。自分たちはそれに報いるべく、豊かな国をつくっていかねばならないのに。

自分の手で、それをうばってしまうわけにはいかない。

「でも、わたし、解き方なんてわからないもの。魔法を使った覚えなんてないし、解けて言われても、全然、わからないし……」

「大丈夫。この魔法はきつと、アンジエが眠れば解けるはずだから」
さきほどの鋭い表情を消して、ロイがふいに明るい笑顔を見せた。
「国の時間をとめるために国のみんなを眠らせた。そして自分は眠れなくなってしまった。みんなが眠っている間にアンジエが眠れないのなら、アンジエが眠ってしまえばみんなは起きてくれるはずだ」
「……そんなことでいいの？」

魔法といったら、なにか呪文を唱えることを想像してしまう。ただ自分が眠ることと魔法が解けるだなんて、嘘にしか聞こえない。

「魔法っていうのはさ、そんなにたいそうなことじゃないんだよ。魔力の高い赤ん坊なんて、お腹がすいたなと思ったら目の前にミル

クが出てくるし。怪我をして痛いと思ったらすぐに自分で治しちゃうし。そういう本能的なもののほうが強くて、呪文なんて本当はあまり必要ないんだ」

だからさ、ほら。ロイがベッドを叩いて目配せする。アンジェがためらって腰掛けたまましていると、彼は苦笑して、肩に毛布をかけてくれた。

「子守唄でもうたう？」

「……ううん、いい」

突然眠れと言われても、今まで眠れなかったのだから簡単に眠れるわけがない。毛布の前をかきあわせて、アンジェはうつむいた。

「……眠れば、魔法が解けるのね？」

「そう」

「みんなが起きたら、また国の時間が動き出すのよね？」

「そう」

「………」

「……アンジェ？」

顔を覗き込もうとするロイから、アンジェは離れた。

「どうした？」

なおも様子をつかがってくるロイが、肩をつかもうと手を伸ばしてくる。アンジェはそれを避けて、ベッドの上に倒れこんだ。

「アンジェ……？」

どんなに逃げても、ロイはアンジェを気にして近づいてくる。覆いかぶさるようにのぞきこまれて、ようやく彼を見るとその瞳がとても近くにあった。

「……こわいの」

「こわい？」

「国が元に戻るのが、こわいのよ」

言っと、涙があふれてくる。それを見られたくなくて、アンジェは布団に顔をうずめた。

「ひとり寂しいわ。ずっとひとりでいるなんて嫌よ。でも、それ

以上に、あの生活に戻るがこわいのよ……」

声が布団の中でくぐもって、あふれる涙が吸い取られてゆく。毛布を強く握りしめ、アンジェは漏れそうになる嗚咽をこらえた。

「わたし以外に世継ぎがいないってことは、いずれこの国をわたしがおさめるようになるってことだもの。それが嫌で、わたし、ずっと、眠り姫になりたいと思ってた……」

幼いころ読んだ、童話の眠り姫。魔女に呪いをかけられたお姫様は、十五の誕生日に糸巻きのつむに指をさし、深い眠りについてしまふ。城中の人々とともに眠りにつき、百年の年月を、呪いを解いてくれる王子様が来るのを待ち続ける。

そんな童話に幼いころから憧れていた。

アンジェは生まれたとき、誰にも呪いをかけられなかった。十五の誕生日に糸巻きのつむに指をさしてみても、血が流れるだけで眠気など襲ってこなかった。

アンジェの元に、王子様は来ない。アンジェを愛して、この国と一緒におさめてくれる王子様なんて、来るわけがない。眠った唇に口付けをしてくれる愛しい人なんて、あらわれたりしない。

アンジェは国のために、好きでもない隣国の王子と結婚しなければならぬ。この両の肩には重すぎる、民の命をあずかっていかなければならぬ。

幼いころ夢見ていた自分と、今の自分はとても違う。

「眠りたくなんてないわ！ 魔法なんて解けなければいいのよ！」
アンジェは、声をあげて泣いた。

現実を見なければいけないのはわかっていた。国を救わなければならぬのもわかっていた。けれどどうしても、夢を捨てられなかった。

眠り姫に憧れて。憧れてあこがれて。いざ国が眠りに落ちても、アンジェだけは眠れなかった。眠り姫になれるなら、自分が真っ先に眠れたはずなのに、目が冴えて眠気などまったく感じなかった。

「誰も、わたしの声なんて聞いてくれないもの！」
国に、自分のほかに姫がいるわけでもなく。王子様が迎えに来てくれるわけでもなく。目覚めの口付けをしてくれる人は決して現れず。

途方にくれてすごした一年はとても長かった。
ひとりですごすのはとてもさびしい。

けれど、国が元に戻るのはとてもこわい。

「……泣いていいよ、アンジェ」

背を向けて泣きじゃくるアンジェを、ロイがそつと、抱き寄せた。
「今までそうやって、誰にも言えずにためこんでたんだよな。だから、泣いていいよ」

泣き顔を見られたくないアンジェをわかって、ロイは背中からそ

つと、包み込むように腕をまわしてくれる。その広い胸があたたかくて、アンジエはまた、涙がこぼれた。

「そっかそっか。だからアンジエは、国に魔法をかけちゃったんだな」

「……かけるつもりなんてなかったもの」

「わかってる。ひとりで悩んで、考えて、押しつぶされそうになつて。自分を守ろうとしたアンジエの心の奥底が、本能的に魔法をかけちゃったんだよな」

わがままを言う子供をあやすように、ロイが甘い口調で語りかけてくる。それがまた、乾ききっていたアンジエの心に染み渡り、涙をあふれさせた。

「俺はしがない魔術師だからたいそうなことは言えないけど、国民の命を背負うてことは、やっぱりすごく、精神的に重くなるんだと思うよ。アンジエの年で、もうそういうことを考えないといけなくなつたなら、どこかで反発する心があつて当然なんだ」

「でも、わたしは……」

アンジエは、逃げたのだ。姫の責任が怖くなって、逃げてしまった。国の時をとめてまで、自分の前につきつけられた現実から逃げようとしていた。

国を出て、民を救う方法を探そうとしなかった。ただ、自分の殻にこもっていた。

「わたしに、国なんて無理だよ……」

もう、なににたいして泣いているのかもよくわからなくなっていた。一人でいるときもよく泣いていたはずなのに、ロイに抱かれて泣くのはそれとは全然違っていた。流した涙でぽっかりとあいた心はいつも虚ろだったはずなのに、今は彼の優しさが、甘いミルクのように身体の中に染みわたってゆく。

「大丈夫だよ、アンジエ。アンジエはきっと、ひとりで抱え込みすぎてるんだよ」

ロイの声がとても心地よい。

「この眠り病の一件で、他の国もまた違う動きを見せ始めたんだよ。このすきに領土を奪おうって動くんじゃないかって、眠り続けるみんなの心配をしてるんだ。優秀な魔術師を集めてなんとか国に踏み込めないかって、隣の国がすごく心配してるよ」

その穏やかな声色に、あふれる涙もすこしずつおちついてくる。けれどアンジエはロイの腕が心地よくて、すすり泣きをいつまでも続け、あたたかさに身をゆだねていた。

「アンジエは今、大人になろうとしてるんだ。このままずっと夢見ていたいけど、現実もあるって、わかってるんだよ」

「でもわたし、逃げてるもの……」

「悩んで、悩んで、魔法をかけるぐらい思いつめていたってことは、それだけアンジエが真剣に考えていたっていうことだよ。ただ単に逃げようとしていたら、自分に魔法なんてかけたりしない」

だから、だいじょうぶ。泣き腫らしたまぶたを開くと、ロイの唇が微笑みながら動いていた。ようやく顔をあげたアンジエに彼はほっと息をつき、抱きしめていた身体を離れた。

涙でまぶたが赤くなり、瞳もとろんと熱っぽくなっている。くすくすんと子供のように甘えるアンジエの頬を、ロイがそっと手のひらで撫でた。

end

「……ちなみに、縁談の話もさ。アンジェからはつきり嫌だっ
て、ほかの交友関係の結び方を提案してもいいんじゃないか？」

「わたしに、そんなことができるの？」

「それはアンジェ次第だけどさ。やろうと思えば、アンジェには
できるさ。なんてったって、これだけ大きな魔法を使えるぐらいの力
を持ってるんだしな」

励ましているのかそれともけなしているのか。受け取りきれなく
て眉をひそめるアンジェに、ロイは肩をすくめて笑った。

「もう、こわくないか？」

「……まだ、こわい」

魔法をかけたのが自分の仕業なら、それを解いて現実に戻らな
ければならない。わかっているのだけど、あともうすこしの勇気が出
ない。

まだ逃げていたい。あともうすこしだけ、逃げていたい。

「でも、戻らないといけないのよね……」

「無理して戻ると、きつとまた魔法をかけるだろうから。無理はし
ないほうがいい」

無理やりに魔法を解こうとしないで、アンジェの様子をうかがい
ながらゆつくりとうながしてくれる。だからアンジェはつい、ロイ
に甘えてしまう。もっと厳しく言ってくれればと思うけれど、これ
は自主的に動かないといけないこと。甘えてばかりいらなかった。
「……ロイ」

目じりに残る涙を布団にぬぐって、アンジェは優しい魔法使いを
見上げた。

涙を吸ったまぶたが、重くなり始めていた。

「わたしが眠って、目が覚めたら、ほんとうに国はもとに戻って
いるのね？」

「戻ってるよ。約束する」

「わたし……怒られたりしない？」

おそろおそろといったアンジェの口調に、ロイが破顔した。

「しないよ、絶対」

くすくすと笑って、彼はアンジェの頬を撫で続ける。それが心地よくて、アンジェはゆったりとまばたきをした。

「目が覚めたら、ロイはいなくなってる？」

「ちゃんとそばにいるから大丈夫」

それでも不安そうな顔をするアンジェに、ロイはすこし考えてから、指先をアンジェのあご先にのばす。アンジェがまぶたを伏せると、彼の動く衣擦れが聞こえた。

唇に、ロイの口づけを感じる。

「おやすみ、アンジェ」

その余韻が消えぬうちに、アンジェの意識がずっと遠ざかっていった。

「 アンジェ様！」

アンジェが目を覚ますと、城の中は大騒ぎになっていた。

てつきり一年も眠っていたことにみんな混乱しているのだろうと思っただけ、どうやらそういうわけでもないらしい。眠る前は誰もいないはずだったベッドの周りをたくさんの人に囲まれて、王妃は娘が身体を起こすなり、涙を流しながら強く抱きしめてくれた。

アンジェが起きたと知らせを受けたのか、国王までもがあわただしく部屋にはいつてくる。みんなも目が覚めたばかりで忙しいはずなのに、普段は物静かな父までもが娘の起床を涙ながらに喜んでいった。

起き抜けのその騒がしさに、アンジェはただただ、呆然とするしかなかった。そしてひとりの騒ぎが落ち着き、両親がアンジェ

のもとを去ったところに、ようやく事態を飲み込めるようになっていた。

まだかすみの残る頭で、アンジエはロイの顔を見る。約束どおり、彼は目が覚めても、ベッドの傍らですっとアンジエを見守っていてくれた。

「……どうして、本当のことを言ってくれなかったの？」

国のみんなが眠っていたわけではない。

眠っていたのはアンジエ自身。あれはアンジエがかけた、魔法の中の世界だった。

「アンジエ自身が、魔法をかけたことに変わりはないだろうか？」

ロイはアンジエを目覚めさせるために、あの魔法の中に入り込んできたのだった。

目覚めの仕度でばたく侍女たちを眺めながら、ロイはそのすきをみはからい、唇をアンジエの耳元に寄せた。

「おはよう、眠り姫」

間近にある瑠璃色の瞳がなんだか照れくさくて、アンジエとロイは、くすりと笑いあったのだった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208i/>

ハロー、眠り姫

2010年10月8日15時26分発行